

思想史研究という仕事

I 社会思想史という分野について

「学問への招待」と銘打った特集号に寄稿する以上、学生に対して社会思想史とは何かをまず明らかにし、その特質と問題点などを指摘し、興味を抱かせるような一文を草するのが務めであろう。ところがこれがなかなか難しい仕事なのである。そもそも社会思想史とは何かという肝心の部分が厄介な問題を含んでいるのだ。

英語やフランス語には思想史という言葉は存在するし、最近では思想の社会史という概念も登場した。しかし、社会思想史となるとピタリとあてはまる外国語が思い浮かばない。かつて英語を母語とする留学生が各教官の担当講義名を英訳してくれたものを見ると、*socio-*

intellectual history となっていた。なるほどと思わなくもないが、造語であることは明らかである。もちろん社会思想史の入門書を見れば社会思想史とは何かということが書いてある。ところがその定義たるや著者によって様々だし、どれを読んでもすっきりしない。要するに、これまで納得できる定義にお目にかかったことがないのである。

そこでやむを得ず、社会思想史とは何か、というより「思想史」という外国にも通用する概念の上に乗っかった「社会」とは何かという点について筆者の思うところを示しておきたい。ただし、ここで述べる見解が他の社会思想史の専門家たちの一致した意見でないことはいうまでもない。

森 村 敏 己

「社会」という言葉を冠する場合、そこには総合化への

なる。

の意思が込められていることが多いようだ。つまり、経済思想史、政治思想史、教育思想史、科学思想史といったある程度はつきりとした固有の領域をもつ思想史に対して、社会と人間の関係を限定された領域に閉じ込められることなく総合的に捉えたいという意図が現れているといえよう。しかし、社会と人間の関係などという途方もない問題を特定の視点も定めずに分析などできるはず

そこで見方を変えて、国際的に通用する「思想史」という言葉になぜ「社会」が加わる必要があったのかを考えてみることにする。社会思想史の教科書を見ると、力点の置き方は違っても、対象とする時代、領域は常に近代ヨーロッパだといつてよい。つまりは、近代ヨーロッパの思想を研究することが事実上の社会思想史研究なのである。

はない。それに、社会と人間の関係を問うのは多くの学問が背負っている課題であり、何も社会思想史だけがこのテーマに関して特権的な地位を占めているわけでもない。また、現実問題として、社会思想史とはいいながら、個々の研究を見れば、その著者が受けてきた学問的訓練や関心の所在によって何からの個別思想史に近づいているのが普通である。たとえば、ある人物なり時代なりをテーマに思想分析をするにしても、研究者によって経済思想なり政治思想なり、どこかに力点を置かざるを得ない。そうなると一応は経済思想史を名乗りながらも、狭い意味での経済に偏らず広く目配りのきいた研究と、自称社会思想史の研究とを区別することは事実上不可能と

なぜ近代ヨーロッパなのか。「市民社会」という言葉を耳にしたことがあるだろう。市民社会とは近代ヨーロッパに生まれ、その価値観や原理が普遍的な意義を持ち、ゆえに学ぶに値するとされてきた社会である。自由、法の下での平等、自立した個人、民主主義、こういった概念で彩られた市民社会に学ぶことが日本の近代化にとって急務だとされたのである。確かに、戦前の日本の知識人にとって自分たちを取り巻く現実と引き比べてみた場合、ヨーロッパに成立していると考えられた市民社会は現狀批判の道具としても、これから歩むべき方向としても魅力的なものであっただろう。また、戦後、学問を指した人々が、なぜ日本は愚かな戦争に突入したのかという

反省も含めて、成熟した市民社会の成立にどれほど熱い思いを寄せていたかは戦後生まれの筆者には想像も及ばぬほどであったろう。社会思想史の「社会」とは要するに市民社会の「社会」であって、社会思想史という言葉自体がこうした熱意を伝えているといえる。

しかし、問題はいまやこうした思いで社会思想史を学ぶことは難しいという点にある。市民社会は様々な意味で懐疑的となっている。まず、かつて理解されていたような市民社会が本当にヨーロッパに存在したのかという問題がある。社会史は過去の人々の生活実態を明らかにするうえで多くの成果を挙げた。そこで示される人々の姿は自立した個人だの近代的自我だのといった理念では捉えきれないものだ。もちろん、ヨーロッパには日本とは違うタイプの社会が生まれ、育ってきたのは確かだし、これを「市民社会」と呼ぶというのならそれでよい。だが、順序はむしろ逆である。われわれにとつて市民社会とはヨーロッパの現実を表す言葉である前に、理想化された観念であった。それがヨーロッパに実在したかどうかは別の問題である。さらに、現実のヨーロッパの価値観が批判にさらされるようになっただけでなく、

今では理想化された観念としての「市民社会」もその価値が怪しくなっているのである。

誤解のないようにいえば、筆者は日本がヨーロッパに学ぶべきものはやないといった議論をしているのではない。ヨーロッパを学ぶことで得られるものは多くある。しかし、ヨーロッパ以外の地域にも同じく学ぶことはいくらかもあるのだ。ヨーロッパ中心主義が批判されるようになって久しい。ヨーロッパ以外を対象とした地域研究は益々盛んとなり、われわれの価値観は問い直され、揺さぶられ、鍛えられている。こんなことは言わば当たり前ともいえるべき事柄で、今更言い立てるのも恥ずかしいくらいであるが、しかし、こうした中で、社会思想史という学問はヨーロッパ中心主義から抜け出すことに不熱心であったように見える。

思想史に「社会」という語を加えることで示そうとするもの、それが総合化への意欲だというのならそれでもよいだろう。だが、すでに述べたように、意欲は買うにしてもその実現は難しい。また、「社会」が事実上「市民社会」だとしたら思想史は社会思想史を名乗ることでかえってその対象を、下手をすると視点までをも限定さ

れかねない。であれば社会思想史を標榜することにはか
なる意味があるのか筆者は疑問に思っているのである。

そのため近頃では筆者自身、自分の専攻を単に思想史
と呼ぶことにしている。本人が自信をもって語れない
「社会」という語を冠するのはいささか無責任ではない
かという思いもあるし、それに「社会」を取り去ること
でかえって自由を取り戻せるといった気分もある。言い
換えれば、自分の仕事が個々の個人的な思想史を総合す
る壮大なものだといった不遜さからも、市民社会論の生
成・発展という視点からヨーロッパ思想を分析するとい
う枠組からも自由になれるのである。もちろん、社会思
想史という学問自体が歴史の浅いものだけに、むしろ社
会思想史という言葉に新たな意味付けを行い、活性化し
ていくのが筋ではないかという批判もある。また、社
会思想史は初めから市民社会論の分析に限定された学問
ではないとして筆者の勉強不足や理解の浅薄さを指摘す
る声もあるだろう。だが、筆者としては現在もちあわせ
ている知識と理解にしたがって態度を表明する以外に術
はないのである。

II 思想史研究をめぐる問題

筆者の専門領域はフランス啓蒙思想である。フランス
啓蒙といえはそれこそ近代ヨーロッパ思想の中でもとり
わけメインテーマのひとつであり、ある意味では近代の
悪弊の「元凶」とされ、見方によっては評判が悪い。ヨ
ーロッパ中心主義を批判しておきながらフランス啓蒙思
想とは何事かと思う向きもあるだろうが、その批判には
おいおい答えていくことにして、ここでは思想史研究を
続けながら日頃感じている問題をいくつか考えてみたい。
思想史一般を念頭に置きながら議論を進めるつもりだが、
具体例として挙げるのが十八世紀のフランスに偏ること
はお許し願いたい。

思想史研究の対象はいうまでもなく思想である。折角
「社会」を取ったのだから、ここでは思想という言葉を取
り限定的に捉えることはしない。哲学の領域に関するも
のであれ、経済思想や政治思想に近いものであれ、研究
者の関心と問題設定によって考察の対象となるものを取
りあえず「思想」と呼んでおく。ところが、分野による
区別を捨象してもなお、思想史の対象は極めて多彩であ

る。昔の日本人のように海外に出掛けることさえ容易ではなく、留学といえど生涯に一度の大イヴェントであった時代には、手に入る本も参照できる資料も限られていた。思想史の対象はおのずと大思想家の書き残した作品に限られるし、翻訳するだけでも困難な仕事であったと推察される。明治・大正期の翻訳を見ると固有名詞の訳し方からして珍妙なものが多く、われわれとは置かれた状況が違うのであり、それを責めることはできない。

しかし、現在では外国に出掛けるくらい造作もない。研究者は専攻する国の図書館や文書館を自由に利用できるし、日本にいながらでもマイクロフィルムなどの手段で資料を入手することは可能である。このことは当然、研究の方法と対象に格段の広がりを与えることになった。

また、今世紀初頭以来の歴史学の発展も見逃せない。いわゆるアナール学派は歴史研究の対象を広げ、従来では思いもよらなかつたテーマを取り上げると同時に、方法上でも様々な革新を続けてきた。全体史、長期変動、心性、系の歴史学といった概念の登場、それに対する批判や反省、隣接諸分野―人類学、社会学、文学など―への強い関心は歴史の領域と方法を多彩なものにしてきた

のである。たとえば、今では確固たる地位を占めている民衆史だが、資料の上で制約の多いこの分野が成立するために新しい資料の開拓だけでなく、資料の新しい読みが必要であったことは容易に想像がつく。

さらにマルクス主義の権威が低下したことを指摘すべきだろう。このことは何もベルリンの壁の崩壊に始まったわけではない。たとえばフランス革命史を例にとればフランソワ・フュレがドニ・リシュエとの共著で従来のブルジョワ革命論を痛烈に批判したのは一九六五年である。⁽¹⁾

また、経済史が歴史や思想を理解するうえでもっとも重要な要因だとする立場―これは何もマルクス主義だけの特徴ではなく、アナール学派の重鎮だったフェルナン・ブローデルなどにも見られる態度だが―もかつてほどの説得力を失った。要するにグラランド・セオリーにはもはや頼れない。研究者は各自が自分の方法を模索、選択しなければならなかつており、マルクス主義の立場を堅持するという選択をした場合でも、あらためてその有効性を論証することが求められるようになったのである。研究者にとつてこうした事態は、よくいえば自由が拡大したわけだが、逆に混迷が深まったともいえる。

このような状況を念頭において思想史研究の問題を考えてみたい。

まず、特定の思想家に焦点を当てるタイプの研究を考えてみよう。その人物が残した著作を精密に読み、作品の構造を明らかにし、思想の全体像を理解するというのが基本的な作業ではあるが、そこには厄介な問題が含まれている。作品自体を独立した空間と見なして、それが書かれた歴史的環境から切り離して考察するという立場を取るのではないかぎり、一般に研究者は対象となる人物の個人史、つまり、どのような知的、社会的環境に生き、どんな人々と交流し、どんな本を読んでいたかといった情報や、当時の社会状況、経済状況、思想状況などを調べ、その人の思想を歴史の中に位置づけようとするのが普通である。

ところが、こうした外的な要因が思想を理解するための道具としての程度有効かは疑わしい。もちろん、誰であれ自分が生きた文化の枠組みから自由になれるはずはない。どんな思想家といえども、その時代の知的・精神的風土とでもいべきもの―心性といってもよいが、それでは自覚的・意識的な知的作業を示すニュアンスが

弱いように筆者には感じられる―に制約を受けている。どうにでも解釈できる一言半句を捕まえて、実際にはありもしない近代性とやらを好みの思想家の中に読み取るなどという時代錯誤的な過ちを犯さないためにもこうした外的な環境を把握しておく必要はある。

しかし、外的要因から思想家の作品への理解が機械的に導けるはずがないこともまた自明である。当時の知的・精神的環境および社会的・経済的状況はこれこれであった、ゆえにこうした思想が生まれたといった単純な図式が成り立つわけではない。また、同じ社会に生きながら人によっては異なる思想を抱くことを説明するために、個人史に重きを置いてみても、実はその単純さに変わりはない。かつては啓蒙思想家たちを、どの階級の利害を代弁しているかという基準で分類してみせるような研究も存在したが、こうした見方は同じグループに分類された思想家たちの著しい差異や豊かな個性を無視するだけの結果に終わるのが関の山である。

外的要因から思想を演繹することは不可能だ。一方で、時代錯誤を避けるためには外的要因は無視できない。では、どの程度まで外的要因を説明や理解の道具として用

いることが適当なのか。その線引きは不可能に近い。また、外的要因のうちの要素がとりわけ重要なのかといった問題も解決不可能といってよい。筆者自身の経験をいえば、外的要因への配慮は時代錯誤を避けるための抑制力として意識することが多いが、正直いって、自分の解釈の正当化のために持ち出したことも幾度かある。臨機応変にとか、節度をもってとかいえば聞こえは良いが、要するにこれは原則をもたぬままのつまみ食いである。

次に書物の社会史と呼ばれる分野の成立が思想史に突き付けている問題を考察しよう。D・モルネの先駆的研究以来、書物の普及について大きな関心が払われるようになった。⁽²⁾多くの研究者の努力により、今では各階層毎に保有していた書物の傾向や時代を経るにしたがってそこに生じた変化などが明らかにされているし、⁽³⁾また、近年では非合法出版物の調査や書物を読む態度にまで研究が進み、十八世紀フランスの読書世界の実情が少しずつ姿を現してきている。⁽⁴⁾ここで問題なのは、当時世評が高くよく読まれた作品と、われわれが啓蒙期の重要な作品と考えている著作との間にかなりのずれが存在することだ。もちろん、ずれがあることは何ら驚くべきことではない。

二百年前の読者とわれわれとは感性も価値観も違う以上、評価する作品にもおのずと差は出てくる。ある意味ではこうしたずれこそ思想史研究者にとっては貴重なものだといえる。ロバート・ダーントンは歴史研究を行う際の心構えに触れて、過去への間違った親近感を戒め、むしろ過去との接触によりカルチャーショックを受けることが異質な社会を理解するために必要だとしているが、⁽⁵⁾こうした態度は思想史研究にも求められる。今のわれわれには少しも面白くない本が当時のベストセラーであったとしたら、逆に現在では十八世紀を代表する書物と目されている作品が当時余り注目されていなかったとすれば、そこには啓蒙時代のフランス思想を理解するための重要な鍵が隠されているはずなのである。

有名な例をひとつ挙げよう。ルソーの作品のうちもっとも売れたのは『新エロイズ』という書簡体小説であった。平民の主人公が家庭教師先の貴族の令嬢と恋仲になり、一線を越えるが、彼女の父親は身分違いの結婚を認めず、娘は結局父の言い付けに従い、親子ほども年の違う男に嫁ぎ、主人公の青年は傷心を癒すべく旅に出る。しかし、やがて彼はかつての恋人とその夫に迎えられ、

奇妙な三角関係が始まる……。われわれはこのような物語の設定自体に違和感を感じるし、また主人公の過剰とも思える感情の吐露にはついていけない。しかし、十八世紀の読者はこの小説を熱狂しながら読んだのだ。それほどばかりか、小説の登場人物たちが実在すると思っていた読者も多くいたのである。一方、思想史の概説書はいうに及ばず、高校の教科書にも必ず載っている『社会契約論』はルソーの作品中もっとも売れなかった本のひとつだ。この作品を収録している全集版が相当売れているから、かつてモルネが考えていたほど読まれなかったわけではないようだが、それでも『新エロイズ』との差は歴然としている。もしわれわれがルソーの思想それ自体の分析に沈潜するのであればよいが、ひろく十八世紀フランス思想とは何であったのか考えようとすれば、この事実は重要な意味をもってくる。

思想史は一握りの大思想家たちの列伝で成り立つものではない。特定の時代、空間を対象として選び、広くその社会の思想状況に迫るといふ作業が重要なのである。もちろん、啓蒙思想期の作品をすべて読破し、そこで論じられている問題を残らず扱うことなど不可能だ。研究

者の側が何らかのテーマを設定する必要はある。所詮は限られた角度から見た思想状況に過ぎない。だが、それでも今日では忘れられた作品や人物に光を当てること、あるいは当時は読まれなかったがのちに重要視されるようになった作品の意味を考えることで、啓蒙思想という言葉から連想される月並みなイメージを振り払い、いつの間にか幅をきかせている図式的な解釈に異を唱えることが可能となるのである。啓蒙思想と聞いてわれわれが抱く既成のイメージや先入観をそのまま研究に持ち込み、すでに存在する図式の中に研究対象を当てはめることはたやすい。だが、既存のイメージや図式を疑い、再検討するのでなければ研究者の仕事は有益でもないし、まず何より面白くないのである。

偉大な知性が徹底的に考え抜き、時による風化を耐え抜いた古典的作品はもちろん重要である。しかし、十八世紀フランス思想を形成しているのはこうした作品群ばかりではない。たとえば、われわれはフィロゾフたちの論敵であった人々についてどれだけ知っているだろう。当時の思想界においてイエズス会とジャンセニストの対立は重要な問題であったが、ルソー研究者に比べこの問

題の研究者がどれだけいるだろう。もちろん、フィロソフは思想の進歩に貢献したのに対し、彼らの批判者はいわば反動的、保守的な連中なのであって学ぶに値しないというのならそれでもよい。だが、こうした態度はわれわれの価値観に従って思想というものをランクづけることである。それでは既存の図式を疑うことは難しい。もしわれわれが想像している以上に、いわゆる反動的、保守的な論客が当時高い名声と信用を誇っていたとしたら、これまで抱いていた啓蒙時代のイメージは明らかに修正を迫られることになり、ひいてはフランス十八世紀を啓蒙時代と呼ぶことの是非そのものが問われる可能性も生じるのである。

歴史の話になるが、絶対王政という言葉がある。その基礎は整備された官僚制と常備軍といったような説明をかつて習った覚えがあるが、当時の官僚制は現代人がこの言葉から連想するイメージとは懸け離れたものだし、常備軍とはいっても閔兵式が終われば人数が激減するよくな代物であった。また、絶対王政とはいいいながらその実態は国王の意思が何の抵抗もなく貫徹されるようなシステムからは程遠い⁶。どこが「絶対」なのか首をかしげ

たくなる。同じことは啓蒙思想にも言えるのである。「啓蒙」という華やかな言葉から思い浮かぶイメージを鵜呑みにすべきではない。とくに、思想史に何がしかの興味をもってくれる学生を念頭に置いていうなら、先入観を一切持つなどいっても無理だろうから、せめて自分の先入観を疑うために勉強をするのだという心掛けが本を読む二つである。たとえば『★★★入門』などという本を読んでから古典を読み、なるほど入門書の言う通りなどと納得するくらいなら本など読んでも仕方がない。

ここで思い出すのは「革命が啓蒙思想を生んだ」とするロジェ・シャルチエの逆説である⁷。通常は啓蒙思想と呼ばれる一連の思想運動が十八世紀のフランス人の思想や価値観に変化をもたらし、それがフランス革命を可能にした精神的土壌を形成したとされている。もちろん、啓蒙思想が直接革命を起こしたわけではない。たとえばルソーの本を読み、人民主権論を学び、王政を倒そうと決意して行動に出た、こんな単純な人間はいない。革命の直接の引き金はなによりも当時の財政危機であろう。しかし既存の制度への批判や国王の神聖さへの懐疑などがある程度広がっていなければ、革命はありえなかった。

そして、こうした変化を支えたのが啓蒙思想だといふのである。

シャルチエの逆説はこの常識を疑うよう迫る。われわれは一七八九年七月十四日以降に何が起きたのかをすでに知っている。また、革命の指導者たちがいわゆる啓蒙思想家たちの名を挙げ、彼らから受けた思想的影響を認めていることも知っている。事実、ロベスピエールはルソーの崇拜者であったし、バルナーヴはモンテスキューの愛読者だ。一七九一年七月十一日革命議会は偉人を埋葬する施設へと衣替えしたバンテオンにヴォルテールの遺体を移送した。こうした事情を知っているわれわれは当然、やはり啓蒙思想はフランス革命の起源のひとつなのだと考える。しかし、逆から見れば、われわれは革命というフィルターを通して啓蒙思想を理解しているのではないか。言い換えれば、革命家たちの言説を信じ、彼らが影響を受けた思想、あるいは革命という変化を説明するのに相応しいと思われる思想だけに光を当て、これに啓蒙思想という名を与えているに過ぎないのではないか。これがシャルチエの議論である。

もちろん、この逆説はあくまで逆説である。十八世紀

の半ばの知識人たちは自分たちが新しい思想運動を展開しているという自覚を持っていたし、彼らを批判する陣営も既存の価値観が危機に瀕しているという意識を強く抱いていた。また、シャルチエ自身、啓蒙思想とは呼んでいないものの、革命を可能にした様々な文化的変化を指摘している。ただ、彼は書物というものにこうした変化の原因を見ることに反対しているのである。

こうした議論には書物の影響力を重視するダーントンの批判が込められているが、そのダーントンの研究もありきたりの啓蒙理解に揺さぶりをかけるうえで興味深いものである。彼は禁書の世界に注目する。十八世紀のフランスにおいて流通していた書物のほぼ半分を占めていたとされる禁書を調査することで、従来とは違ったベストセラーのリストを作成することができる。そこに登場する作品の多くは今日では誰も読まない類の書物であった。ボルノグラフィ、誹謗・中傷文書、ゴシップ集などがベストセラーの上位を占めている。ところが、ここでは既存の道徳、宗教権威、国王の権威が痛烈に批判され、揶揄されている。つまり、ダーントンによれば既存の価値観を掘り崩し、革命を準備したのは偉大な思想

家たちのテキストであるよりも、こうしたボルノや中傷文書の洪水であったというのだ。⁽⁸⁾

シャルチエとダーントンは互いに批判し合う仲とはいえ、二人の議論はともに啓蒙思想を再検討するうえで多くの示唆を与えてくれる。シャルチエの議論は書物という媒体を通して思想が及ぼす力について考え直す機会を与えてくれるし、ダーントンの仕事は研究の対象とする領域を変えることで、同じ時代の思想状況がまるで異なる風景となって現れることを具体的に教えてくれる。研究者の努力と方法次第では、新しい十八世紀思想史―それを啓蒙思想と名付けるか否かは別として―を描くことはまだまだ可能なのである。

最後に技術的な問題になるが、資料を扱ううえで注意すべき点を考えてみたい。

思想家の残した作品を読む際、そこに書かれているのが歴史的な事実だと思ふものはいない。それはあくまでその人物の世界観であり、意見であり、立場である。ところが、書簡や回想録はどうか。その記述が単に事実を書き記しているだけのものに見える場合、われわれはこれを鵜呑みにしないであろうか。ところが、一見、事実

の記載と見えるものが怪しいことが多々あるのだ。分かりやすい例としてルソーの『告白』を挙げよう。この作品はルソーが自分の生涯を振り返り、本人に言わせれば「自然のままに、まったく真実のままに正確に描かれた唯一の人間像」を伝えるために執筆された。しかし、星の数ほどいるルソー研究者はこの伝記の記述の真偽を徹底的に洗い直してくれている。もちろん、過去の回想だから思い違いや、記憶違いもある。しかし、自己正当化という強烈な目的意識をもって書かれたこの著作において、ルソーは明らかな虚偽、あるいは自らの非を認めたくないために、自分の心の中で事実を歪曲し、ついには本人自身それが真実だったと思ひ込んでしまった嘘を多く述べている。日記を書く習慣のある人なら覚えがあるだろうが、誰に見せるわけでもない日記においてさえ、人間がとことん正直に振る舞うことはないといつてよい。まして、他者が読むことを想定した作品においておや、である。この意味でルソーの作品に含まれる嘘や誤魔化しを理解することはたやすい。では、次の例はどうか。

ヴォルテールは一七五〇年から一七五三年にかけてプロイセン国王フリードリヒ二世に招かれてベルリンで廷

臣として王の側に仕えていた。ところがこの二人はどちらも強烈な個性の持ち主で、いつまでも蜜月時代が続くはずもなく喧嘩別れをしてしまう。その間の事情を知ろうと研究者たちは残された書簡を読む。ヴォルテールという人物は手紙マニアとでもいうべき人で膨大な書簡を残しているため、生涯のどの時期であれ、書簡を手掛かりにできるという利点がある。そこで問題の時期の書簡を読んでみると、この喧嘩どう見てもフリードリヒの方が分が悪そうだ。甘言でヴォルテールと呼び寄せておきながら裏切ったという印象を受ける。ところが、これらの書簡が真っ赤な偽物であることが近頃判明したのである。われわれがリアルタイムに書かれたと信じていた書簡は、実は二人が喧嘩別れをした後、ヨーロッパ中が自分たちの諍いに注目するであろうと予測したヴォルテールが、実際に書いた書簡を送った相手から取り戻し、これをもとに自分が一方的な被害者だという印象を与えるためにあらためて創作した「作品」だったのである。⁹⁾ 研究者は二〇〇年もの間、ヴォルテールの作戦にまんまと嵌められていたことになる。

本人の証言の信憑性だけが問題なのではない。ある思

想家が書いたとされる作品が実はそうではなかったという場合もある。十八世紀のフランスでは厳しい検閲制度のため、カトリック教会や王政を批判する書物を合法的に出版することは極めて困難だった。禁書の世界が膨れ上がっていった原因はここにある。非合法出版物に正直に著者の名を掲げることは危険である。このため、偽名を使った出版物が横行することになった。その場合、著者の特定は必ずしも容易ではない。かつてはデイドロ作とされていながらそうではなかった作品が多くあるのも、ひとつにはこうした理由による。また、出版社の側が著名な哲学者の作品だということにすれば売れるということで、誰が書いたか分からないような代物を無断でその哲学者の作品として出版することもある。ひどい話だが、当時では珍しいことではなかった。これらの場合はまだよい。たちが悪い場合はテキストを勝手に改竄してしまふ者が現れる。エルヴェシウスは生涯に二冊の哲学書と一冊の詩集を残したが、二冊目の哲学書は死後出版であった。一七七三年に初版が出たこの作品は幾度か版を重ね、幾つかの全集版にも収録されたのち、フランス革命の最中あらたに編まれた全集版にも収められることにな

った。ところが、この全集版と初版とを比べると、その記述には少なからぬ違いがある。この点について全集の編者は、初版のもとになった原稿を書き上げたのちもエルヴェシウスは作品に手を入れ続け、最終的に完成したのが今回の全集に収録したテキストだと説明している。ちなみにこの編者はエルヴェシウスの手稿の受遺者であり、問題の作品の原稿も彼が保有している。誰もがその言葉を信じた。ところが、これが嘘だったのである。そもそもこの人物は革命の初期、二院制反対という自分の政治的立場に権威を持たせるため、エルヴェシウスによるモンテスキュー批判なる手紙をでっちあげている。だが、この手紙は、すでに出版されているエルヴェシウス本人の作品とは食い違う見解を含んでいるのだ。このため編者はこの矛盾を隠すため、エルヴェシウスのテキストを改竄し、こちらが本物だと主張することになったのである。⁽¹⁰⁾

以上の三つの例はどれも故意の歪曲や嘘が問題になっている。それ以外の場合も示しておこう。カルロ・ギンズブルクは『ペナンダンティ』（せりか書房、一九八六年）で十六世紀から十七世紀にかけて行なわれた異端審

問の記録をもとに民間信仰がキリスト教の枠組みの中で悪魔崇拜へと変容させられていく過程を描いた。キリスト教以前から続いていた豊穰儀礼を行う者たち、つまりペナンダンティたちは自分たちの日常語であるフリウーリ方言で証言し、書記はイタリア語でこれを書き留めるという作業を行っている。ここですでに言葉の壁という問題があり、被告の声はいわばフィルターを通してしか聞こえないわけだが、もっと厄介なフィルターが存在する。尋問する異端審問官と被告であるペナンダンティたちとの世界観の違いである。

問題とされる豊穰儀礼を悪魔崇拜ではないかと疑う異端審問官はいうまでもなくキリスト教的世界観の持ち主であり、教養人である。一方のペナンダンティは農民世界の住人であり、審問官とは別の世界観に立っている。

その場合、異端審問官の質問の意味がペナンダンティには理解できないということが起こる。また、審問官にとっても被告の証言は自分の世界観にはうまく収まらない。このため審問官は被告の証言の意味をキリスト教的世界観に適合するように読み替え、被告たちをもその方向に誘導していく。そして、ついには被告自身、自分たちが

行っていたのはキリスト教とは無縁な昔ながらの農耕儀式ではなく、悪魔崇拜だったのだと認めるようになっていく。自分にとって意味不明あるいは理解不能の言説をそのまま認識することは極めて難しい。どうしても馴染みのある、安定した価値体系の中に収まるように読み替え、理解可能なものとして認識したい。これは決して故意の歪曲ではないが、人間が陥りやすい罠のひとつであることに違いはない。ギンズブルクは慎重にこのフィルターをくぐり抜け、ベナンダンティの肉声に迫っているが、この作業は研究者にとって決してたやすいものではない。

裁判記録でもこの通り、扱いは慎重さを要する。他の公的記録や事実を単純に記述しただけに見える文書も油断はならない。あらゆる資料は読み解くべきテキストなのであり、どんな文書であれ、そこには書き手の戦略が込められていると考えるべきである。

III なぜ思想史を学ぶのか

研究者などという仕事をしていると「勉強が好きなんですわね」と言われることがたまにある。嫌いですが、と言

ってもなかなか信じてもらえないのでハイハイと答えることにしているが、よく考えれば、本当に嫌いなことを誰に命令されたわけでもないのに仕事として選ぶはずはない。そこには自分なりの意味があるに違いない。

なぜ思想史を学んでいるのか。分かりやすい説明としては、今、自分が生きている社会の中で直面している様々な問題を考えるうえで、過去の思想の中にその答えを求めるためだといったところか。あるいは、自分が信じている価値や逆に批判すべきだと考えている事象の起源を探り、より深い理解を得たいのだという説明もありえる。しかし、どちらの理由付けも筆者にはしっくりこない。

まず、第一の説明について考えてみたい。確かに過去の思想を調べていくと現代の問題につながるものも少なくない。解釈の仕様によってはどんな思想もわれわれにとって何らかのヒントになりうる。だが、過去の思想家たちは現在とは異質の社会に行き、われわれとは異なる価値観や世界観のもとで当時の問題と取り組んだのである。それを忘れて過去の提言を今日にそのまま活かせると思うのは余りに素朴であろう。これでは「経営者が学

ぶべき人間管理術を徳川家康に見る」といった類の雑誌と変わらない。ここまで素朴な例は極端にしても、思想の現代的意義という聞えのよい言葉には注意を払うべきである。意義がないとは言わない。しかし、それに囚われすぎると過去の思想にわれわれの価値観を押し付けるだけの結果になりかねない。つまり、対象となる思想家の問題関心とは無関係に、特定の側面だけに光が当てられ、そこばかりが肥大し、ゆがんだ思想家像を描いてしまふ危険が生じるのである。

「歴史的限界」という言葉がある。極めて優れた思想家でありながら、やはり昔の人間だ、今からみれば評価しがい部分もある、しかし、それを責めてはいけない、これは歴史的限界でやむを得ないことなのだから、というわけだ。たとえば平等の問題にあれほどうるさいルソールが男性への女性の従属を当然視していたり、逆に男女の平等に敏感なシャトレ夫人が身分上の差別には何の疑問も抱かないといった場合がこれにあたる。このように一見、時代錯誤を戒めるかのようなこの「歴史的限界」という言葉だが、限界を限界と見ること自体、ある意味ではわれわれの価値観の押し付けである。男女間の不平

等であれ、身分間の差別であれ、それを成立させている世界観や価値体系さらには心性が問われるべきであって、不平等や差別は「歴史的限界」として大目に見てやればそれで済むといった対象ではなく、なぜそうしたイデオロギーが支配的でありえたのかを理解し同意ではないすべき対象なのである。

次に過去の思想に現在の理念や事象の起源を求めるという態度だが、こちらは「宝探し」あるいは「ないものねだり」に陥るといふ危険をはらんでいる。あるいは当時使用されていた言葉の意味を誤解することにもつながりかねない。たとえばリシュタンベルジェの『十八世紀社会主義』（法政大学出版社局、一九八一年）という研究がある。私有財産の廃止や規制あるいは分配の平等などのちの社会主義的要素につながりそうな言説を探求した作品で、著者の博識には感嘆の念を覚える。しかし、そこで取り上げられる思想の大半は古代ギリシアとりわけスパルタと共和制ローマを理想化する、現在ではシヴィック・トラディションと呼ばれる価値観に基づいた極めて復古的なものである。もちろん、十八世紀においては復古的であった思想の系譜が、十九世紀になって本格的

に成立した資本主義に対するアンチテーゼという新たな意味を担うようになったといえることはできる。こうした逆説的関係の発見が思想史の面白さのひとつであることは否定しない。だが、ここから十八世紀にも社会主義は存在したなどと考えるのは早計である。十八世紀における私有財産への批判は十八世紀の文脈で理解しなければならぬ。デイドロの唯物論には弁証法の萌芽が見えるか否かといった問題の立て方も同じことで、下手をするとならないものねだりで終わる。

では、筆者自身は思想史研究の意義をどう考えているのか。これまでの議論から分かるように、筆者は時代錯誤や現在の価値観の押し付けを何より避けようとしている。つまりは、思想をその歴史的な脈の中で理解したいということだ。あるいは、あるテーマを設定し、研究を進めることで対象となる社会の思想状況を再構成したいというのが筆者の願いである。その場合、ある思想の起源がここにあるのではないか、あるいは自分が直面している問題を解く鍵が見つかるのではないかとといった期待は抱かないようにしている。しかし、過去を再構成するためだけに研究するのはそれは単なる懐古趣味ではな

いかという疑問もあろう。それには、自分が行っているのは一種のケース・スタディーなのだと答えておこう。

また、問題意識の欠如を責める意見もあるだろうが、問題意識がなければそもそもテーマの設定からして不可能だと言いたい。十八世紀の思想書を読み漁れば自動的に当時の思想状況が浮かび上がってくるわけではない。問いかけることで初めて相手は答えてくれる。ただ、その際、性急に直接的な答えを求める姿勢は、過去の思想の中にありもしない幻影を見てしまう危険があると思うのである。

何度も言うように、筆者は現在とは異なる社会の異なる思想を学んでいる。そこには「今」にそのまま通用する答えはない。しかし、別の世界観、別の価値観を自分の判断基準で判断することなく学ぶことで、これまで疑問視していなかった自らの価値観、世界観を問い直し、相対化することはできる。ひいてはそれが自分が生きる社会の問題を考えるうえでも役に立つのだと信じてみたい。何とも迂遠な話に聞こえるかも知れないが、こうした遠回りが嫌いな人は思想史研究にも、歴史研究にも向かないといったら言い過ぎだろうか。

- (1) Furet, F. et Richet, D., *La Révolution française*, Paris, 1965.
- (2) Mornet, D., "L'enseignement des bibliothèques privées 1750-1780", *Revue d'histoire littéraire de la France*, tome 17, 1910, pp. 449-492. 岩波書店・モルネ『フランス革命の知的起源』上・下巻、勁草書房、一九六九—七一年。
- (3) 書物の社会史の成果については、長谷川輝夫「書物の社会史と読書行為」『思想』八二二号、一九九二年二月、五二—六八ページ。
- (4) Darnion, R., *The Forbidden Best-Sellers of the Pre-Revolutionary France*, New York and London, 1995. 岩波書店・ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』岩波書店、一九九四年。ロジック・シヤルチエ『読書と読者』みすず書房、一九九四年。
- (5) ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』岩波書店、一九八六年、四—五ページ。
- (6) 二宮宏之「フランス絶対王政の統治構造」『全体を見ろ眼と歴史家たち』木鐸社、一九八六年、一一二—一七一ページ。
- (7) ロジック・シヤルチエ『フランス革命の文化的起源』岩波書店、一九九四年。
- (8) Darnion, *op. cit.*
- (9) Magnan, A., *Dossier Voltaire en Prusse (1750-1753)*, Oxford, 1986 (*Studies on Voltaire and the 18th Century*, tome 244).
- (10) Koebner, R. M., "The Authenticity of the Letters on the *Esprit des Lois* attributed to Helvétius", *Bulletin of the Institute of Historical Research*, XXIV, no. 69, May, 1951, pp. 19-43.

(一橋大学助教授)